

くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート 特別企画  
ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト

一橋大学佐野書院  
ベートーヴェン室内楽シリーズ Vol. 15

## 二つの「ディアベリの主題による変奏曲」

ピアノ 菊地 裕介  
お 話 西原 稔(桐朋音大教授)

### PROGRAM

1. ディアベリのワルツの主題による変奏曲集(1824)  
～50曲のうち31曲とコーダを演奏～
2. ベートーヴェン(1770～1827)  
「ディアベリのワルツの主題による33の変奏曲」  
ハ長調 Op.120(1823)



アントン・ディアベリ(1781～1858)

2019年9月29日(日) 14:00 開演  
一橋大学佐野書院 サロン

主催 ボランティアチーム 如水コンサート企画  
<http://www.josuikai.net/circle/josuiconcert/>

## 「一橋大学佐野書院・ベートーヴェン室内楽シリーズ」について ～ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト～

一橋大学兼松講堂(1927年竣工・政府登録有形文化財)は、その響きの良さから、創建当初より内外の演奏家が来演する“知られざるコンサート・ホール”でもありましたが、15年前、70数年ぶりに行なわれた大改修工事竣工の翌2005年から、大学と地域との交流を目指して『くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート』がスタート。皆さまのご支援のもと、30回余の公演を行なって参りました。

このコンサートのテーマの一つが、2012年から始まった《ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト・シリーズ》ですが、その一環として、佐野書院のサロンを会場に、2015年から新たに「一橋大学佐野書院・ベートーヴェン室内楽シリーズ」もスタートいたしました。

ベートーヴェン(1770～1827)は、ハイドン、モーツァルトなどのウィーン古典派音楽を継承し発展させる過程で、〈初期〉・〈中期〉・〈後期〉で自らの作風を大きく変貌させ、ロマン派への魁(さきがけ)となっています。兼松講堂や佐野書院での《ベートーヴェン・プロジェクト・シリーズ》では、毎回のコンサートにおいて、楽聖の57年にわたるこの「変革」を辿るプログラムを企図しております。

さて、今回の「佐野書院ベートーヴェン室内楽シリーズ」は第15回目。本日のプログラムはピアノ独奏で、複数の独奏楽器で演奏される〈室内楽〉ではありませんが、ベートーヴェンの晩年のピアノ曲の大作『ディアベリ変奏曲』と、ディアベリが編纂した『ディアベリの主題による変奏曲集』(から32曲)を、ピアニスト・菊地裕介さんに演奏して頂きます。

前者は、バッハの「ゴルトベルク変奏曲」と並び称される変奏曲の大作。後者は、ディアベリがベートーヴェンと同時代に主にオーストリア圏で活躍していた作曲家たち50人にそれぞれ1曲ずつ依頼した変奏曲集ですが、シューベルトや若きリスト(11歳)あるいはモーツァルトの四男の作品も登場、ベートーヴェン時代のウィーンの音楽風景の“鳥瞰図”でもあります。

この二つの大曲が並べて演奏されるのは極めて稀ではありますが、今回もat homeなサロンで、ごゆっくりお楽しみください。

### Profile

#### 菊地 裕介 Yusuke Kikuchi (ピアノ)



東京生まれ。桐朋女子高校(共学)音楽科2年在学中に日本音楽コンクール第2位入賞、卒業と同時に渡仏し、ローム・ミュージックファンデーションより助成を受け、パリ国立高等音楽院高等課程を経てピアノ研究科を修了したほか、5つの一等賞を得てピアノの他に歌曲伴奏、作曲書法の高等課程を修了。また文化庁芸術家在外研修制度の助成を受け、ハノーファー音楽大学に学びドイツ国家演奏家資格を取得。皆川紀子、加藤伸佳、ジャック・ルヴィエ、アリエ・ヴァルディの各氏に師事。マリア・カナルス国際、ポルト国際、プーランク国際コンクールで優勝、またジュネーブ国際、ベートーヴェン国際(ウィーン)など、数多くのコンクールに入賞する。

CDは、ベートーヴェンのピアノソナタ全32曲、「エロイカ変奏曲・ディアベリ変奏曲」、ラヴェルのピアノソロ作品全集(オクタヴィア・レコードTRITON)など録音も多数。

欧州の多くの国々でリサイタルを開催、また多くのオーケストラと共演を重ねている。国内では東響、東京都響、東フィル、東京シティフィル、仙台フィル、大阪シンフォニカー、名古屋フィルなどと共演。室内楽では清水和音、永野英樹とのピアノデュオやオーボエの巨匠モーリス・ブルグ、若手ではフルートの瀬尾和紀との共演など、いずれも好評を博している。

東京藝術大学、桐朋学園大学、洗足学園音楽大学の非常勤講師、名古屋音楽大学客員准教授を歴任。秋吉台ミュージックアカデミーなど、各地にてセミナー、マスタークラスの講師、ならびにコンクール審査等を務める。小池百合子都知事の招集により東京都政策企画局東京未来ビジョン懇談会メンバー。

株式会社 演 代表取締役。東京音楽大学専任講師。

なお、『くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート』には、「ピアニストたちの夢の饗宴」(2008.5)、「新日本フィルハーモニー演奏会」(2012.5)、「ピアニストたちのベートーヴェン」(2017.6)に出演。『一橋大学佐野書院ベートーヴェン室内楽シリーズ』には、第4回(2016.5)、第8回(2017.8)に出演して頂いている。

## 西原 稔 Minoru Nishihara (ナビゲーター)



山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。桐朋学園大学音楽学部教授。18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。

著書に『音楽家の社会史』、『聖なるイメージの音楽』、『音楽史ほんとうの話』、『ブラームス』、『シューマン全ピアノ作品の研究』(以上、音楽之友社)、『クラシック 名曲を生んだ恋物語』(講談社)、『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』(平凡社)、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』(以上、アルテスパブリッシング)、『世界史でたどる名作オペラ』(東京堂出版)、『ピアノの誕生・増補版』(青弓社)などの著書のほかに、共著・共編で『ベートーヴェン事典』(東京書籍)、訳書に『魔笛とウィーン』(平凡社)、監訳・共訳で『ルル』、『金色のソナタ』(以上、音楽之友社)、『オペラ事典』、『ベートーヴェン事典』(以上、平凡社)などがある。

2012年からスタートした『くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート』の“ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト”では、ほぼ毎回、ナビゲーターとしてご登場頂いている。

## Program Note

### □ アントン・ディアベリについて □

ベートーヴェン晩年の大作のお陰で今にその名を残しているアントン・ディアベリ(1781~1858)はオーストリアの出版業者、作曲家。

ザルツブルク近郊に生まれ、幼少より、教会音楽家で役僧の父から音楽の手ほどきを受ける。その後、ザルツブルク大聖堂の少年聖歌隊員をつとめ、大聖堂のオルガン奏者ミハエル・ハイドン(J.ハイドンの弟)より音楽理論と実技指導を受けている。

1796年、ミュンヘンのラテン語神学校に入学し僧職を志すも断念し、ウィーンに出る。

ピアノとギター教師のかたわら作曲・編曲も手掛けつつ、シュタイナー音楽出版社で写譜と校正係をつとめ、1815年頃にはベートーヴェンから名指しで校正を任されるほど信頼を得るに至った。(因みにピアノ・ソナタ第27番<1814年>、28番<1816年>は同社から出版されている。)

1818年、ペーター・カッピと共同でカッピ=ディアベリ音楽出版社を設立(ピアノ・ソナタ第30番<1820年>、31番<1822年>、ディアベリ変奏曲<1823年>は同社から出版)。1824年に独立。

経験豊かな音楽家として、この時代の音楽的流行趣味に応えただけでなく、すぐれた作品を世に送り出した。特に若きシューベルトの歌曲「魔王」Op.1をはじめ多くの重要作品を手がけた功績は大きい。

なお、作曲家としては、ピアノ・ソナタ、フルートやギターのソナタ、ピアノ小品、歌曲、教会作品など多数あったが、今日では1~2曲を除き殆ど消失している。

### ■「ディアベリのワルツの主題による変奏曲集」(1824年)

1819年、ディアベリは自作のワルツ主題(32小節)を、ベートーヴェンをはじめチェルニー、シューベルト、リスト(当時7歳)、モーツァルト2世(4男)など、オーストリア在住のピアニストや作曲家51人に送り、これを主題とした変奏曲の作曲を1曲ずつ依頼、これらを集めて《祖国芸術家連盟》の名称で出版する企画を立てた。

ベートーヴェンは(後述のごとく)この主題が気に入らず、当初は断ったが、やがてこの珍しい競作に関心をもち、50人の集団とは別に33曲からなる変奏曲の大曲を完成。1823年、単独で作品120として出版。50人の作品は翌1824年に《祖国芸術家連盟・第2部》として出版された。

ディアベリは、自作の主題に続く変奏曲を50人の作曲家のアルファベット順に並べ、コーダ(終曲)はベートーヴェンに師事していたC.チェルニーに依頼している。

本年4月、90歳で亡くなった大の親日家の名ピアニスト、イェルク・デームスは1971年にこの曲を録音しているが、その際、次のように述べている。

『この歴史的に興味深い寄せ集め作品は、当然ベートーヴェンの作品との比較を迫られるが、その比較は不当であろう。』

それぞれの作曲家たちの意図はベートーヴェンのそれとは根本的に違っている。つまり、ベートーヴェンが意識して記念碑的な作品を作曲しているのに対して、50人の個々の変奏曲は、より大きなモザイクに組み立てられるモザイク用の小さな石に比べられるからで、そのモザイクとは、ピーダーマイヤー時代<sup>[注]</sup>のウィーンのクラヴィーア芸術のエンサイクロペディアのごときものである。』

〔注〕1820～40年代にドイツ、オーストリア等の諸国で見られた芸術・美術上の市民的な様式傾向。単純かつ優美で、素材の美しさを活かした直截なデザイン、明るい色調を特色とした。

また彼は50人の作曲家中、シューベルト、フンメル、モシュレス、トマーシェク、11歳の少年リスト、カール・チェルニーの変奏曲を高く評価しつつ、次のようにも述べている。

『個々の変奏曲の質の差がいかにかい大きいものであっても、全体は、音楽的な面でも、クラヴィーア技法の面でも、なにか時代様式のごときものを示している。1820年頃の音楽美学は一代前のようにしっかりと整えられたものでは、もはやなかったとしても、ベートーヴェンの出現に対するほとんど世界的な讃嘆の念が、共通するものを創り出したのであった。』

※イェルク・デームスは上述の録音に際し、当時のLPレコードの演奏時間の制約から50曲中31曲とコーダを演奏していますが、本日、菊地裕介さんには、故J.デームスへのオマージュとして彼が録音に選んだ31曲とチェルニーによるコーダを演奏していただきます。

## ■ベートーヴェン(1770～1827)

### 「ディアベリのワルツの主題による33の変奏曲」八長調 Op.120 (1823年)

ベートーヴェンが最初に出版した作品は、12歳(1792年)頃の『ドレスラーの行進曲を主題とする9つの変奏曲』(WoO.63)であったことは、その後、音楽史上、最大の変奏曲の達人とも称されるベートーヴェンにとって、象徴的である。

当時(18世紀後半～19世紀前半)のウィーンでは、貴族たちがお気に入りのピアニストに主題を与え変奏曲を即興演奏させて楽しむ風潮があったが、この風潮はベートーヴェンを一躍、ウィーンの“寵児”にした。しかし彼は主題の音型を古典的な手法で装飾的に展開していく“エンターテイメント”に飽き足らず、主題を様々な要素に分解して性格的に変化させていく(性格変奏)という“芸術作品”にまで高めた。そのような変奏曲をピアノ・ソナタのソナタ形式、ロンド形式、自由な幻想曲形式にもひんぱんに取り込んでいる。

彼は独立したピアノ変奏曲(4手用ピアノ曲も含む)だけでも21曲書いている。当初(1799年頃まで)は、当時はやりのオペラ、ジグシュピール、民謡などから主題を取っていたが、1800年代に入ると、自作の主題を用いた変奏曲も書くようになり、「エロイカ変奏曲」(Op.35)、「創作主題による32の変奏曲」(WoO.80)など、規模の大きな作品も登場する。

さて、1819年、ディアベリから変奏曲の依頼があった時、その主題のつまらなさ(…ベートーヴェンはこの主題を“靴屋の縫ぎ皮”〔靴の穴を修理するために靴屋が使う皮〕と名付けたという…)に加えて、50人の作曲家たちと一緒にされたくない…という彼のプライド、あるいは、折しも『ミサ・ソレムニス』に着手した頃でもあったため、当初はこの申し出を断った。が、やがてこの提案に興味を持ち始め、『交響曲第9番』の作曲と併行して、1823年、ピアノ音楽史上最大の変奏曲を完成させた。

まず奏されるディアベリの主題は、3/4拍子の愛らしいありふれたワルツだが、第1変奏は4/4拍子の行進曲で早くもベートーヴェンの“顔”が登場する。

目眩く華麗・多彩な変奏が進んだ後、第22変奏では、突如としてモーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」の冒頭でレポレロが歌うアリア〈夜も昼も苦勞している、…召使はもうこりごりだ〉の旋律が登場。ベートーヴェンの弟子のチェルニーによれば、ディアベリに作曲を督促されてこのテーマが思い浮かんだという。

第29変奏から第31変奏までの3変奏は、ソナタの第2楽章の緩徐楽章を思わせ、抒情性に溢れたハ短調が続き、ベートーヴェンが到達した深い精神世界そのもの。続いて第32変奏は変ホ長調の壮大な2重フーガが展開。カデンツァのあと、ポコ・アダージョとなり、次いで希望に満ちたハ長調のテンポ・ディ・メヌエットの最後の第33変奏が始まる。高貴で静穏な気分で行進するが、後半は最後のピアノ・ソナタ(第32番ハ短調Op.111、1822年)の第2楽章(終楽章)を思わせるように、静かに曲を閉じる。

後期のピアノ・ソナタにみられる変奏曲とフーガの融合が、この作品の中ではさらに崇高なまでの高みに達している。